

お茶の時間

数字の魔法

井上 廣司 陸自72

人に自分の考えを理解してもらうために大切なことは、先ず「相手にわかりやすい言葉を使うこと」である。一般の人に専門用語を並べ立てたりすれば、その時点で拒否されてしまう。

逆に相手に信用してもらうには、「事実、例え話を付け加えること」である。そして、もう一つが「数字を使うこと」で、話に具体性と真実味を付加することができる。

国会で騒動になっている「森友学園」問題では、首相夫人が関わっていることが大きいが、ごみ撤去費用として約8億円が売却費から差し引かれたことも国民感情に火をつけた。8億という数字は、一般国民の金銭感覚からは、許し難いのもかもしれない。

改めて、数字の魔力を感じている。最近、ワシントン・ポスト紙は、就任以降のトランプ大統領の不正確な発言が3000回を突破したと伝えた。

3000回と聞けば、「口から出まかせ大統領はどうしようもない」との認識を持つが、初めての米朝首脳会談を開催したこと等を見れば、何とか頑張っている大統領でもある。

米国の学校で繰り返される銃撃事件は、今年の発生件数が週に1件以上に達し、5月で死者数は31人である。これに関して、ある民間機関が、同時期に世界の紛争地帯に派遣されている米軍の死者数13人と比較して、危険と隣り合わせの兵と比較して、安全であるはずの学校が、異常なほど危険地帯であると指摘した。一瞬、「ああそうか」と思いそうになったが、紛争地帯と学校を並べられると兵士が可哀そうである。学生を紛争地帯に派遣したら、突拍子もない数字が出てくることは明白である。これが、数字の魔法である。

もう一つ例を紹介する。米国では、医療用麻薬の乱用が問題になっている。その一方で、医療現場では、臓器提供者の増加を呼び掛けている。これを組み合わせた数字がある。薬物中毒死による臓器提供者は2000年には59件、全体の1・2%であったが、医療用薬物の乱用者の増加に伴い、2016年には1029件、13・7%に跳ね上がった。この数字のせいではないが、トランプ政権の医療用薬物の乱用についての目立った行動は見えない。

統計の数字もよく目にするが、統計は切り口を変えただけで、受けるイメージが逆転することもある。数字の使い方には注意したいものである。

(6月15日 記)